*あなたの町の情報誌 **** 9

日本ステンレス工業株式会社

生まれた。父は寛、

母は

月市真木三九五一番地に

一月二十五日、山梨県大

田中教城は大正四年十

ることを喜んでいた。

のお気に入りで、朝は築

う。

敗戦

〒409-0617 山梨県大月市猿橋 電話=0554-22-2500 FAX=0554-22-5234

Vol.139 2010

たかのただ一人である。

たまという。兄弟は妹の

生まれた家は寺ではない

から、親からもらった名

前は「泉」といった。真

度もいっていた。良き師

う。これは本人が後に何

の導きを持つことで人間

月号

名説教師 いの

くなった。

田中

教城

とおっている。 あいだでは今も「泉さ ん」「泉にいちゃん」で 木の人や田中家の親戚の 教城の残した記録によ

あったが、今は一軒もな の田中姓を名乗る家が たという。真木には三 びて甲斐の国、真木に来 ると、田中家の先祖は伊 豆北条の家来で、落ちの

田道長夫妻とはよく仏法 家である。先代当主、和 は教城の祖父、海平の実 に泊まっていた。和田家 は、 について語り、話ができ 教城は真木にいった時 和田家(屋号は西) としていなかった、 は、

ひとつの転機があったの きるよ」であった、とい 生の一言「泉もやればで のときの担任であった先 は尋常高等小学校四年生 いたずらものの泉に、

変わり得るものであるこ 性を思い立ったのである。 こそ後に幼児教育の重要 とを実体験していたから 生き方はどのようにも

出た。 すると、長野県岡谷市の と思ったらしく、東京へ 歯科医院に入ったが、 尋常高等小学校を卒業 東京では岡野栄泉 自分の仕事でない

あった、いっときもじっ じめた。岡野のひとり娘 で菓子職人の道を歩みは という菓子屋に住み込ん とにかく良く働く人で 当時を思い出して、

祖母

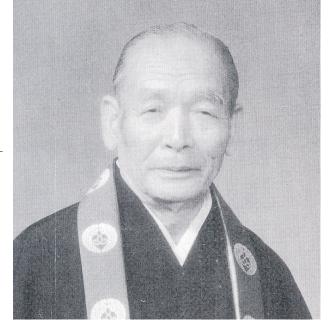
つけては築地本願寺へ

る」といわれる。 地本願寺、夜は仏間にて て白い前掛けをかけてい お経文を読み、白衣を着 る姿が印象深く残ってい

だけでなく、築地本願寺 岡野栄泉時代には仕事

ることは疑えない。 の説教の基礎となってい 二十歳になって陸軍

は、 甲府連隊に入ってからも、 お経が読めるということ



あり、 への毎朝のおまいりをか はもともと強かったので 経も暗記していたという から地元の名刹、 かさなかった。真木時代 から、この方面への関心 はよくお参りもし、 それゆえ、暇をみ 福正寺 お

> 上官の目にとまることで の軍隊では重宝なことで、

揚げ船を降り、故郷の土

に日本の土を踏めた。

佐世保港についた引き

手際のよさで一家は無

を踏んだ時は、

昭和二十

年十月二十八日になっ

あった。

得度して浄土真宗の正式 十一月に教師を拝命し た。 木の福正寺の衆徒となっ の僧侶となり、地元、 昭和十五年六月十五日、 そして、ひきつづき、 真

参ったということであろ この頃の聞法がのち 死と、となりあわせ

時帰国したことがよき機 使の資格を得るために をして九月十六日結婚 で、安川登波子と見合い 会となって、下関市吉見 布教伝道に尽くした。

湯

洗う。炊事をする。この

変なところについてきて となっての生活はすべて の鍬をふるう人々の仲間 大地に立った。満州開拓 したがって広大な満州の はじめての経験で、 登波子は教城の帰満に

ていた。

満州国では吉林省舒蘭県 ことは夢にも思わない旅 寺をあずかる資格を得て、 以後、敗戦までの六年間 下金馬村に興教寺を設立、 日本が負けるなどという は帰らない覚悟であった。 あったから、もう日本に でた。真木にあった財産 立ちであったと思われる。 を処分しての満州行きで ただちに満州国へ開教に 昭和十九年九月、布教 が、 女、 だった。それに、一年に をわかして赤ン坊の体を 事であった。停車時間に 満員で立錐の余地もない のてはずとなった。帰還 状態であった。乳飲子を の列車はあいかわらず よ一団こぞって日本帰還 登波子夫妻にも七月に長 となった。 も満たないうちに、 かかえての列車の旅は難 終戦一年が過ぎて教城 手早く薪を集め、 八月三十日、いよい 教子が誕生していた。

次ページへ続く

しまったと思ったもの



新子牧師から、

山口県美彌

しかし、教城は所々の寺

釈尊や浄土教の祖師の歴史

涙と笑いの名説教師

教城 田中

家にたどりついてみれば、 た昭和二十二年十二月長男 たという戦友からの報告が 長兄はメレオン島で餓死し 妻の実家に身を寄せてい は昭和二十二年十二月八 失意のうちに世を去っ 期待の長男を失った

やっとのおもいで妻の実

市伊佐町に、住職を求めて

母の葬式の数日後であった。 学院長)が生まれた。 教照(前武蔵野大学学長現 向いた。そこで、大正寺の れ考え津村別院にも一時出 その間、教城は一家の生活)建て直しについてあれこ 遠山正導師に会った。 妻の

身をおいていくのか、 浄満寺(下関市吉見)住職、 意を述べたという。 仏教界に身をおいていく決 たずねた。教城はその時、 て考えをただし、仏教界に 信者として生きるのか、 その後、 般 であった。

教とともに、梵鐘と鐘楼の 子が生まれた。入寺後は布 明けて、二月には次女、 建立を思い立ち積極的な托 養法要が修行された。年が 月八日には住職就任入院供 ある。同じ年の暮れの十二 昭和二十四年五月のことで 西宝寺に入ることになった。 口県美袮市伊佐町に移り、 こうして、一家四人は山 照

りのにぎやかな話芸であっ 称名、親鸞聖人讃仰の想い かされたりして最後に合掌 は身振り手振りあり、歌あ を結んでいった教城の説教 道に励み、県の内外にご縁 鉢をおこなった。 ますます深し、 たから、聴衆は笑ったり泣 その後も積極的に布教伝 というもの

師は、

教城の将来につい

け入らないかという誘いを いる寺があるとの情報を受 た。 なく、 いうので、 認可を受けた幼稚園は、二 ていたのである。 仕事を発見した。文部省が に分園を建てることになっ 通うのには遠すぎるからと 年後には、伊佐町の子供が 寺でも幼稚園を経営し始め め、それに賛同して所々の 幼児教育の重要性を説き始 昭和三十年一月に正式に もうひとつの大事な 町の中の桜ヶ丘

しての嫁や孫の教育が主た

とである。 がその一生を振りかえると、 とができるのは不思議なこ だいたいそのようにみるこ いうわけでもないであろう の人生を設計していた、と 教城は十五年単位で自分

ねるようになり、ひたすら ろから、 地位にしりぞいた。このこ 長男に住職を譲って前住の 歳に達した教城は結婚した 昭和五十年春、 仏跡参拝の旅を重 数え六十

を巡るうちに、布教だけで 昭和五十五年の次男、円城 に触れることを楽しんだ。 はじまった。これからの十 そして孫に囲まれた生活が の結婚とともに、円城夫妻 五年間は、おじいちゃんと 六十歳を過ぎてからは、

大仕事」

は御恩報謝の大仕事

さて

の花咲く妙境界

あすから

黄金

受けた。

恩賜のたばこを吸ってから、 冒しはじめていた。兵隊で る仕事であったといえよう。 教城は年来の喫煙が身体を 七十歳を過ぎた頃から、

れを支えたものは阿弥陀

来様。阿弥陀如来と歩んだ

の流浪の人生であった。

そ

文字どおり「独去、独来_

九歳で母)、故郷を離れた、

親を失い(十八歳で父、十

田中教城の人生は早く両

その量は増えることはあっ

涯を閉じた。

出しては吸っていた。平成 ても、 ない、といって、キセルを こを吸わねば頭がはたらか 特に、説教の前には、たば 宝寺の第十六世を継職させ 一年五月、次男、円城に西 減ることはなかった。

寒山寺の人に会い、 国旅行に発って行った。 関や萩のご法中の人達と中 には、読経にも息継ぎが短 くなっていた。その後、 その披露の法要を営んだ頃 八月二十日には上海では、 お名号 下 こに落ちても二人づれ 記して というものであり、もう一 つは、 にまかすうえには」 き我が身かな 松葉のあれみてごらん 「あららくや 「帰去来、 一種類あって、 炳霊船中七度八分と 帰去来、

弥陀の誓い 参考資料 為世燈明

田中教城説教集

執筆者 山

こぼ

ħ

تلح

た

た。 飛んで炳霊寺参拝をめざし の揮毫をたのみ、蘭州へと とい野の末 とし場の草むらから

山の奥

命落

進 り、 た。 は、 なった。妻は旅行の仲間と がとうをいい、 ることにしたが、病状は 別れて蘭州に残り、看病す 二十五日朝、 飛行場に降り立った教城 一退し、伊佐町のみなさ 呼吸はさらに困難にな 夜明けをまって入院と 地元のみなさんへあり はや呼吸の困難を訴え 七十五歳の生 ついに八月

で死期をさとったか、走り 書きを残していた。それ 教城は炳霊寺参拝の船中 一つは いとど楽し は

とは、

教城の説法の骨子で

が還相回向のご利益である

番の利他のはじまり。

それ

のではない。これからが本

それは死をもって終わった

二人連れの人生。

しかし、

ある。